

鎌倉市

陣出遺跡

—鎌倉市寺分字上陣出393番の11外地点—

2024年12月

鎌倉市

株式会社 イビソク 神奈川営業所



1. S12 竈 南から



2. S12 竈検出状況 南から



3. S12 旧竈土層断面 南から



4. S12 旧竈掘方 南から

巻頭図版 2



1. SI2炉1 左:完掘 南から 右:土層断面 南から



2. SD1 土層断面 西から



3. SK6 土層断面 東から



4. SI2 出土遺物 石帯(丸柄)



5. SI2 出土遺物

例 言

1. 本書は、株式会社イビソク神奈川営業所が実施した、神奈川県鎌倉市寺分字上陣出393番の11外（地番）に所在する陣出遺跡（鎌倉市遺跡No.351）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鎌倉市まちづくり計画部深沢地域整備課の依頼を受けて、区画整理事業に係る事前の記録保存として実施されたものである。調査対象面積は420m²（下層調査は137m²）である。
3. 発掘調査から報告書刊行までの費用は、事業者である鎌倉市が全額負担した。
4. 本調査から報告書刊行までは以下の日程で、株式会社イビソク神奈川営業所（調査担当：金森弘晃、玉城雄一）が行った。

本調査は令和5（2023）年8月16日～10月31日、12月7日～12月28日、1次整理作業は令和（2024）年1月4日～3月14日にかけて行った。2次整理作業、及び報告書作成期間（印刷製本も含めて）は株式会社イビソク神奈川営業所にて令和6（2024）年4月22日～12月25日まで実施した。

5. 本書の編集・執筆は、金森弘晃、玉城雄一、鈴木裕子が行った。写真図版のうち、遺構写真は玉城が撮影し、遺物写真の撮影は蔵野幸雄（クラノ・フォトオフィス）に依頼した。
6. 本書に係る出土資料、記録図面、写真、測量データ等は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 「第6章 鎌倉市陣出遺跡の地形・地質環境とテフラ分析」は上木進二氏（神奈川県災害考古学研究所）に執筆を依頼した。
8. 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々及び、関係諸機関のご協力、ご教示を賜った。ここに記して御礼申し上げます（五十音順敬称略）。

大海絵里佳 大塚達男 鎌倉智士 鎌倉泣塔クラブ 谷口肇 東神合同会社 前川雅夫 馬淵和雄
リーク工業株式会社

【調査体制】

調査担当者 金森弘晃 玉城雄一

調査員 鈴木裕子

測量員 北爪雄峰 宗仲航汰

発掘作業参加者 新井泰輔 石川 淳 伊澤信義 伊藤美則 内田 仁 小高大成 岸 良子 北林俊亮

黒澤譲司 境 雅仁 坂上一乃 佐藤桂子 武内貴江 堤 正樹 処 豊和 野村規子 藤田希美 堀江広行
三澤壮太 森川和之 矢田孔昌 渡部尚美

整理作業参加者 阿部幸子 伊藤晴美 梅津愛美 太田玄紀 太田雄也 金子仁久 木村圭子 小泉有美

小口翔太 小林あきほ 小林朋子 佐々木美希子 菅野美子 杉原弥生 鈴木真紀 土屋由紀 成瀬洋美
原孝子 村主省子 山崎寛人

凡 例

1. 遺構平面図及び断面図で使用した標高は、東京湾平均海面（Tokyo peil T.P.）である。また遺構図に採用した国家座標は、平成14（2002）年4月1日施行の測量法改正で採用された世界測地系である。遺構図版上の方位円は国家座標の真北を表わす。
2. 本書における挿図の縮尺は、各挿図中に明示してあるが、原則として個別遺構図は1/60、遺物は1/3である。
3. 個別遺構図中の線種・線号は以下のものである。
調査区・遺構の上端：0.3mm 調査区の中端：0.2mm 調査区・遺構の下端：0.1mm
4. 挿図中の土層説明では、主体土、混入物、締まり、粘性を記載した。その際、各属性に関する度合を以下のように表記した。
混入土・混入物のサイズ 粒：粒径5mm未満 BL（ブロック）：粒径5mm以上
混入土・混入物の量 多量：35%以上～50%未満 中量：15%以上～35%未満 少量：5%以上～15%未満
微量：5%未満
締まり・粘性 極強い 強い やや強い あり 弱い なし
トーンを使用した表示 地山（岩盤） 切石 焼土範囲（被熱範囲） 炭化物範囲
5. 挿図中の土層説明の土色・土色番号、各時代の各種遺物の土色・土色番号は、農林水産省水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』による。
6. 本遺跡近辺の地山に由来する軟質の凝灰質砂岩は、切り出して加工し、住居跡の竈の構築材（焚口や内壁補強材、支脚等）として使用されている。本文中での呼称は形状や用途に応じて「切石」「支脚」の用語を用い、挿図中では同一のトーンとした。また、基本層序、遺構の土層説明で「砂岩粒」「砂岩BL」としたのも、この凝灰質砂岩の崩れたものである。
なお、本遺跡の地山もこの凝灰質砂岩であるが、上記のものより硬く締まっている。挿図中では「地山（岩盤）」とし、トーン表示とした。
7. 第5章の遺構や下層調査の記載で使用了遺物の数量は、接合前の破片数である。
8. 遺跡名の略号は「JD2364」とし、出土遺物の注記にこれを用いた。注記名はこの遺跡名の後には、遺構名（1イ等）、層位名・点上げNo.の順に記入した。

目 次

巻頭図版／例言／凡例／目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡概観	2
第1節 遺跡の地形と地理的環境	2
第2節 周辺の遺跡と歴史的背景	4
第3章 調査の方法と経過	5
第1節 調査区の設定と調査の方法	5
第2節 調査の経過	6
第4章 基本層序	7
第5章 発見された遺構と遺物	10
第1節 概要	10
第2節 上層調査	10
1. 竪穴建物	10
SI1 SI2 SI3 SI4	
2. 土坑	25
SK2 SK4 SK5	
3. 包含層の落込み	27
SD1 SK1 SK3 SK6 SK7 溝	
第3節 下層調査	29
1. 土坑	29
SK8	
2. 包含層出土遺物	31
a. 縄文時代	31
b. 弥生時代	31
c. 奈良・平安時代	32
d. 中世	33
e. 近世・近代	33
第6章 鎌倉市陣出遺跡の地形・地質環境とテフラ分析	41
第7章 まとめ	49
1. 時代別の土地利用の変遷	49
2. 包含層について	51
3. 竈の構造、構造材について	51
引用・参考文献	53
図版	55

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版1-1	SI2 竈 南から
巻頭図版1-2	SI2 竈検出状況 南から
巻頭図版1-3	SI2 IH竈土層断面 南から
巻頭図版1-4	SI2 旧竈掘方 南から
巻頭図版2-1	SI2 炉1 左：完掘 南から 右：土層断面 南から
巻頭図版2-2	SD1 土層断面 西から
巻頭図版2-3	SK6 土層断面 東から
巻頭図版2-4	SI2 山上遺物 石帯（丸帯）
巻頭図版2-5	SI2 出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査地点の位置	2
図2	周辺の遺跡	4
図3	調査範囲とグリッドの配置	5
図4	基本層序1	8
図5	基本層序2	9
図6	土層調査全体図	11
図7	SI1	12
図8	SI1 竈	13
図9	SI1 出土遺物	14
図10	SI2	15
図11	SI2 竈	16
図12	SI2 旧床面	17
図13	SI2 IH竈	17
図14	SI2 炉1	18
図15	SI2 炉2	18
図16	SI2 出土遺物	20
図17	SI3	23
図18	SI3 竈	23
図19	SI3 山上遺物	23
図20	SI4	24
図21	SI4 出土遺物	24
図22	SK2	26
図23	SK4	26
図24	SK4 出土遺物	26
図25	SK1、SK5	26
図26	SD1	28
図27	SK3	28
図28	SK6	28
図29	SK7	28
図30	下層調査全体図	30
図31	SK8	31
図32	下層調査 出土遺物1 縄文時代、弥生時代1	34
図33	下層調査 出土遺物2 弥生時代2、奈良平安時代1	35
図34	下層調査 出土遺物3 奈良平安時代2	36
図35	下層調査 出土遺物4 中世	37
図36	近現代（左図）と縄文時代中後期（右図）の地形分類図	41
図37	試料採取場所	45
図38	近代の調査地点周辺 1. 明治15(1882)年 迅速測図	50
	2. 大正6～13(1917～24)年 国土地理院二万五千分一地形図	50
	3. 昭和3～20(1928～45)年 国土地理院二万五千分一地形図	50

図39	植須賀海軍工廠造兵部深沢分工場計画図	50
図40	東戦土層断面への遺構投影投影図	50

表 目 次

表1	発掘調査に係る届出の文書一覧表	1
表2	SI1 土器観察表	14
表3	SI1 石製品観察表	14
表4	SI2 土器観察表	21
表5	SI2 石製品観察表	21
表6	SI3 板用石製品観察表	23
表7	SI4 土器観察表	25
表8	SK4 土器観察表	26
表9	下層調査 縄文土器観察表	37
表10	下層調査 縄文時代石器観察表	37
表11	下層調査 弥生土器観察表(1)	37
表11	下層調査 弥生土器観察表(2)	38
表12	下層調査 土器観察表(1)	38
表12	下層調査 土器観察表(2)	39
表13	下層調査 木製品観察表	39
表14	下層調査 石製品観察表	39
表15	下層調査 板用石製品観察表	39
表16	下層調査 土製品観察表	39
表17	下層調査 中世陶器、土器観察表	40
表18	下層調査 近世～近代陶磁器遺物観察表	40
表19	テフラ分析結果	42

写 真 目 次

写真1	遺跡遠景 西から	2
写真2	調査地点から西方を望む 東から	3
写真3	調査地点から東方を望む 西から	3
写真4	遺跡遠景(現地説明会開催時) 東から	6
写真5	試料1～7・10'採取位置	45
写真6	試料8・10採取位置	45
写真7	試料9採取位置	45
写真8	試料1 宝永スコリアの火山砂	46
写真9	試料2 宝永スコリアと焼状軽石9mm	46
写真10	試料3 宝永スコリアの軽石20mm	46
写真11	試料4 S-24-8-2～S-24-9	46
写真12	試料5 S-24-8-2?～S-24-9	46
写真13	試料6 S-24-8-2?	46
写真14	試料7 S-24-8-2?	47
写真15	試料8 S-24-7～8 二次堆積か?	47
写真16	試料9 宝永スコリアの焼状軽石	47
写真17	試料10 宝永スコリアの焼状軽石	47
写真18	試料10' 河床礫と砂沢ラビリや他のテフラが混入	47
写真19	D-4区 一括 軽石 宝永スコリアの焼状軽石	47
写真20	トレンチ北壁土層と試料採取位置	48
写真21	試料11 河床堆積物、砂沢ラビリなど二次堆積の テフラを含む	48
写真22	試料12 中の鋳鉄 直径9mm	48
写真23	試料13 延層貞観スコリアの二次堆積	48
写真24	試料14 貞観スコリアの赤色溶岩片	48

写真25	下層調査 西深掘り区底の岩塊 軟質粗粒凝灰岩	48
------	------------------------	----

図 版 目 次

図版1-1	上層調査完掘全景 南から	55
図版2-1	SI1 検出全景 南から	56
図版2-2	SI1 完掘 南から	56
図版2-3	(上) SI1 東西土層断面 南から	56
図版2-4	(下) SI1 南北土層断面 東から	56
図版2-5	SI1 竈遺物出土状況 南から	56
図版2-6	SI1 竈南北土層断面 西から	56
図版2-7	SI1 竈完掘 西から	56
図版2-8	SI1 竈掘方 西から	56
図版3-1	SI2 検出全景 南から	57
図版3-2	SI2 床面完掘全景 西から	57
図版3-3	(上) SI2 床面南北土層断面 西から	57
図版3-4	(下) SI2 床面東西土層断面 南から	57
図版3-5	SI2 石帯(図16-19)出土状況 東から	57
図版3-6	SI2 竈検出状況 西から	57
図版3-7	SI2 竈南北土層断面 西から	57
図版3-8	SI2 竈遺物出土状況 西南から	57
図版4-1	SI2 竈焚口周辺遺物出土状況 西から	58
図版4-2	SI2 竈完掘 西から	58
図版4-3	SI2 竈掘方 西から	58
図版4-4	SI2 旧床面完掘全景 南から	58
図版4-5	(上) SI2 旧床面掘方東西土層断面 南から	58
図版4-6	(下) SI2 旧床面掘方南北土層断面 西から	58
図版4-7	SI2 旧竈完掘 南から	58
図版4-8	SI2 旧竈東西土層断面 南から	58
図版5-1	SI2 旧竈掘方完掘 南から	59
図版5-2	SI2 旧床面炉1検出状況 南から	59
図版5-3	SI2 旧床面炉1灰検出状況 南から	59
図版5-4	SI2 旧床面炉1検出の灰土層断面 南から	59
図版5-5	SI2 旧床面炉1完掘 東南から	59
図版5-6	SI2 旧床面炉1完掘2 西から	59
図版5-7	SI2 旧床面炉1掘方 南から	59
図版5-8	SI2 旧床面炉2南北土層断面 西から	59
図版6-1	SI2 旧床面炉2完掘 南から	60
図版6-2	SI2 旧床面掘方完掘全景 南から	60
図版6-3	SI3、SI4 検出全景 南から	60
図版6-4	SI3 完掘 南から	60
図版6-5	SI3 竈検出状況 南から	60
図版6-6	SI3 竈東西土層断面(試掘TP5拡張面②) 検出状況 南から	60
図版6-7	SI3 竈東西土層断面 南から	60
図版6-8	SI3 竈完掘 南から	60
図版7-1	SI4 完掘全景 南から	61
図版7-2	SI4 東西土層断面(掘方含む) 南から	61
図版7-3	SI4 土層断面 東から	61
図版7-4	SI4 掘方完掘全景 西から	61
図版7-5	SK2 東西土層断面 南から	61
図版7-6	SK4 遺物出土状況 南から	61
図版7-7	SK4 南北土層断面 西から	61
図版7-8	SK4 完掘 南から	61
図版8-1	SK5 南北土層断面 東から	62
図版8-2	SK5 完掘 西から	62
図版8-3	SD1 (上)土層断面 西から	62

図版8-3	SD1 (下)完掘 西から	62
図版8-4	SK1 (上)土層断面 南から	62
	(下)完掘 西北から	62
図版8-5	SK3 (上)土層断面 北から	62
	(中)灰検出状況 東北から	62
	(下)完掘 東から	62
図版8-6	SK6 (上)土層断面 東から	62
	(下)完掘 南から	62
図版8-7	SK7 (上)土層断面 南から	62
	(下)完掘 南から	62
図版9-1	下層調査 西半分完掘全景 南から	63
図版9-2	下層調査 東半分完掘全景 北から	63
図版9-3	下層調査 西深掘り区完掘 東から	63
図版9-4	下層調査 東深掘り区完掘 北から	63
図版9-5	SK8 (上)骨検出状況 西から	63
	(下)土層断面 西から	63
図版10-1	調査区 東壁土層断面1(北端) 西から	64
図版10-2	調査区 東壁土層断面2 西から	64
図版10-3	調査区 東壁土層断面3 西から	64
図版10-4	調査区 東壁土層断面4(南端) 西から	64
図版10-5	下層調査 B・C-4区 北壁土層断面 南から	64
図版11-1	SI1 出土遺物	65
図版11-2	SI2 出土遺物1	65
図版12-1	SI2 出土遺物2	66
図版12-2	SI4 出土遺物	66
図版12-3	SK4 出土遺物	66
図版12-4	下層調査 出土遺物1 縄文土器・石器	66
図版13-1	下層調査 出土遺物2 弥生土器	67
図版13-2	下層調査 出土遺物3 奈良・平安時代の土器1	67
図版14-1	下層調査 出土遺物4 奈良・平安時代の土器2	68
図版15-1	下層調査 出土遺物5 中世	69
図版15-2	下層調査 出土遺物6 近世～近代	69
図版15-3	下層調査 出土遺物7 木製品・加工木材	69
図版16-1	石製品	70
図版16-2	動物遺体 SK8出土骨	70
図版16-3	土製品	70
図版16-4	近代の金属製品(人釘)	70

第1章 調査に至る経緯

当該地は神奈川県遺跡台帳番号の中の鎌倉市№351遺跡として周知化された範囲の中にある。遺跡を含む範囲で、深沢地域整備事業が行われることとなり、事業主の鎌倉市長（鎌倉市まちづくり計画部深沢地域整備課、以下深沢地域整備課）から遺跡調査業務の発注があり、株式会社イビソクが受注した。鎌倉市教育委員会教育文化財部文化財課（以下、文化財課）は令和4（2022）年9月30日～10月19日に試掘確認調査を行った。この結果、7基の試掘坑の内1基の試掘坑（TP5）から堅穴建物と、土師器、須恵器が検出された。

鎌倉市長（深沢地域整備課）は令和4（2022）年9月8日付で、文化財保護法第94条の規定に基づいて、当該地の埋蔵文化財発掘の通知を文化財課へ提出し、文化財課が神奈川県教育委員会教育長（以下、県教育長）へ送付した。これに対して令和4（2022）年11月4日に県教育長から発掘調査についての通知がなされた。

令和5（2023）年5月30日付で、当該地の発掘調査の委託契約が鎌倉市とイビソクとで締結された。文化財保護法第92条の規定に基づいて、令和5（2023）年7月25日付で、イビソクから鎌倉市教育委員会教育長を経由して県教育長に発掘届を提出し、同年8月9日に県教育長からイビソクに通知がなされた。現地の作業は令和5（2023）年8月16日～10月31日と、12月7日～28日に行った。現地作業での作業中に、下層の遺跡の確認調査を行い遺物が検出されたために、文化財課の指示を受け下層の調査（作業）を行った。発掘調査に関わる文化財保護法に基づく手続きは表1にまとめた。

表1 発掘調査に係る届出の文書一覧表

文書別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
試掘調査					
試掘確認調査の依頼	—	令和4年9月29日	鎌倉市長	鎌倉市教育委員会	
試掘調査の実施日	—	令和4年9月30日～10月19日			
試掘確認調査の依頼	—	令和5年7月21日	鎌倉市長	鎌倉市教育委員会	
試掘調査の実施日	—	令和5年7月28日～9月25日			
文化財保護法第91条に基づく土木工事の通知等					
埋蔵文化財発掘の通知		令和4年9月8日	鎌倉市長	県教育長	市教育長を経由
発掘調査の指示（通知）	文遺第61088号	令和4年11月4日	県教育長	鎌倉市長	市教育長を経由
発掘調査委託契約の締結					
委託契約の締結	—	令和5年5月30日	鎌倉市長、 （株）イビソク神奈川営業所		
文化財保護法第92条に基づく発掘の届出等					
発掘届の提出	—	令和5年7月25日	（株）イビソク神奈川営業所	県教育長	市教育長を経由
発掘調査について（通知）	文遺第50024号	令和5年8月9日	県教育長	（株）イビソク神奈川営業所	市教育長を経由
発掘調査について（通知）	鎌教委文第1611号	令和5年8月24日	市教育長	（株）イビソク神奈川営業所	市教育長を経由
担当者の変更届		令和5年12月2日	（株）イビソク神奈川営業所	県教育長	市教育長を経由
期間の変更届		令和5年12月2日、 令和6年1月5日	（株）イビソク神奈川営業所	県教育長	市教育長を経由

*（株）イビソク神奈川営業所：（株）イビソク神奈川営業所所長、県教育長：神奈川県教育委員会教育長、市教育長：鎌倉市教育委員会教育長

第2章 遺跡概観

第1節 遺跡の地形と地理的環境

本調査地点は、神奈川県鎌倉市寺分字上陣出393番の11外に所在する。湘南モノレール江の島線湘南深沢駅から北西方向に直線距離で約470m、徒歩10分の距離にある。現地は広大な土地が広がっているが、調査地点はその北端部西寄りに位置している。北側は丘陵の南裾が北西から南東に向かって続いている。この崖線の上と下は現在では宅地化が進み、崖線は緩やかなカーブを描いているが、近代初期の地図では凸凹していた。調査地点の南東約300mに残る泣塔（市指定有形文化財）は、現在は独立丘のようにになっているが、近代初期は丘陵の先端に位置していたのが、その後の道路の敷設により分断さ



写真1 遺跡遠景 西から

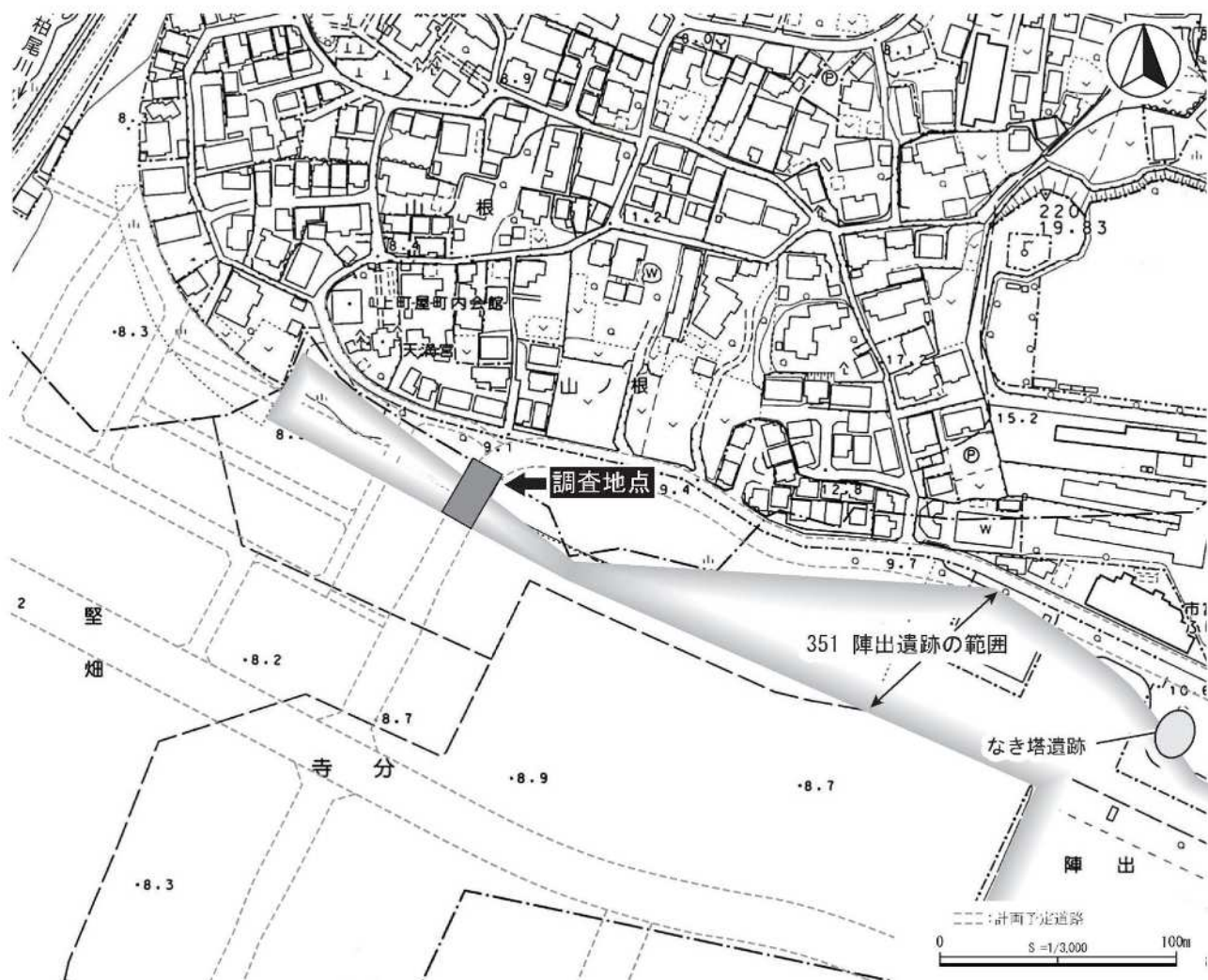


図1 調査地点の位置

れているものである。地山は砂岩層であるために、加工がしやすく人工的な地形の改変が進んでいると思われる。本調査地点は現在は平坦地となっているが、調査範囲の北半部は表土を剥がすと地山の岩盤が検出されたことから、削平されていると考えられ、当初は丘陵の末端が、ここまで延びていたと推定される。なお、本調査地点の現地表面の標高は北端で9.5m、南端は8.7mと、南に向けて若干傾斜している。やや大きな視点から周辺の地形をみれば、本遺跡は、北方を北東から南西へと流れる柏尾川の形成した氾濫原に位置する。この氾濫原は現在では流路が変化しているが、縄文海進後の海退期に柏尾川の蛇行によって形成されたものである。この氾濫原はまた、南東方向に向けて袋状を呈しているが、北側は東から丘陵が延び、西側からは旗立山（丘陵）が南に延びているためにこの形になったと推定される。



写真2 調査地点から西方を望む 東から



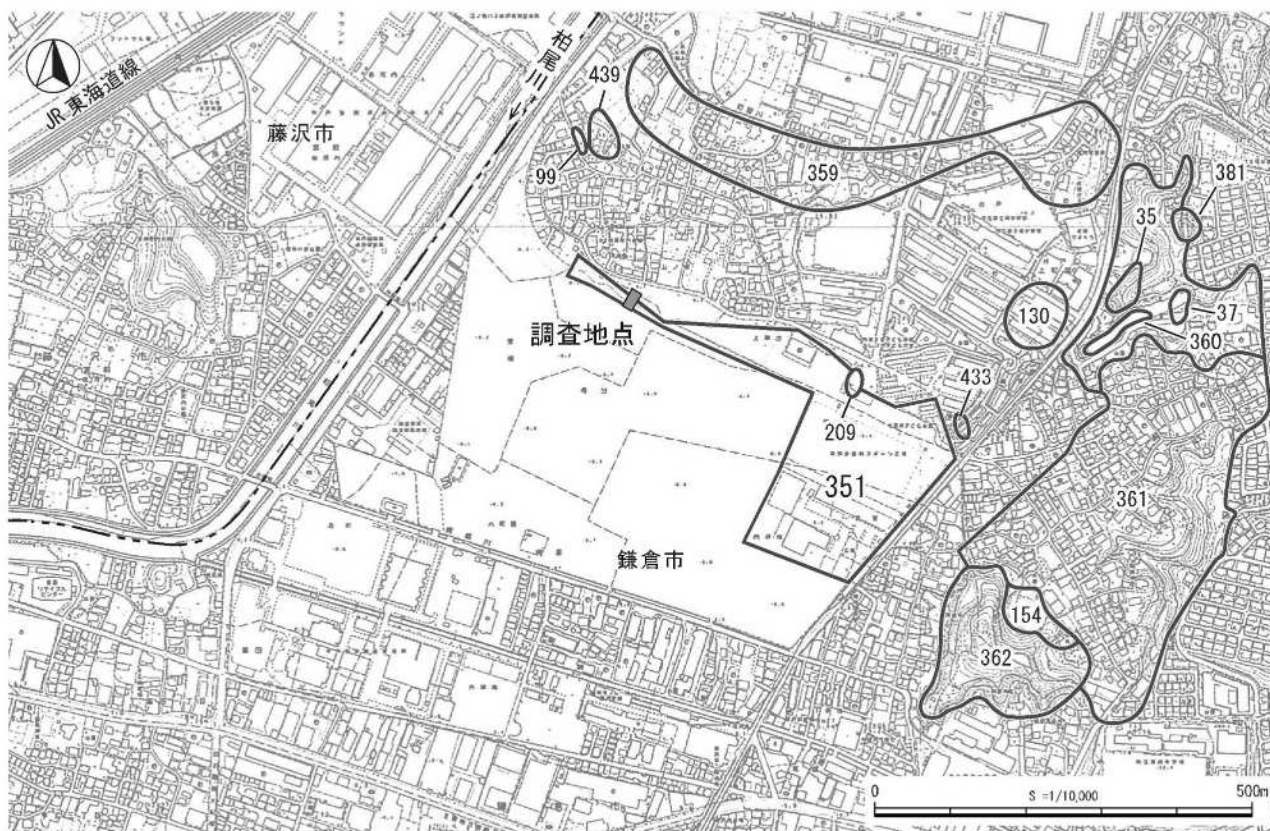
写真3 調査地点から東方を望む 西から

第2節 周辺の遺跡と歴史的背景

本遺跡は、鎌倉市遺跡No.351（時代：奈良・平安・中世、種別：社寺跡？・遺物散布地）として周知化されているが、今回が初めての調査になる。調査の結果、遺構としては奈良・平安時代の堅穴建物4軒が検出され、この時代の集落跡であることがわかった。また、遺物が確認された時代は、縄文、弥生、奈良、平安、中世、近世～近代であった。ここでは、本遺跡の周辺の遺跡と歴史的環境を概観する（図2、図2記載の番号は遺跡番号）。

縄文～奈良、平安時代については、発掘調査の事例も少なく不明な部分が多い。

中世は12世紀末に鎌倉幕府が開かれると鎌倉地域は、国内の政治の中心を担うようになる。中世都市鎌倉近郊の本地域周辺には武家等の墓所であるやぐら（横穴を掘削して、石塔を立て、その下には蔵骨器を埋納する）が多数残る。本周辺の丘陵部には小支谷が入り組む複雑な地形が展開されているが、その斜面を利用してのやぐらの構築が随所にみられる。本調査地点から東南へ約300mには209なき塔遺跡がある。この中に位置する泣塔は宝篋印塔で、文和5(1356)年の銘が認められる。その他、東に約500mの丘陵の東斜面に位置した130陣出やぐら群と、東南方向約450mの丘陵南端の岸に残る433藤塚西やぐら群などがある。一方、北西へ約200mの丘陵西斜面には99泉光院西やぐら群と439泉光院遺跡（中世の遺物散布地）がある。また、東へ約600mの丘陵には城館跡の360寺分藤塚遺跡、東南へ約600mには一つの丘陵のほぼ全体を範囲とする城館跡361大慶寺旧境内遺跡があり、南東約600mには城館跡の362御霊神社遺跡がある。北東約750mには381富士塚が存在する。このうち433藤塚西やぐら群は、第二次世界大戦中に軍事施設として再利用され、大きく増築や改変されていたものの部分的にはやぐらの痕跡を残していたと報告されている（鞠イビソク2023『藤



35. 上町屋横穴群 36. 本町上横穴群 37. 狐坂横穴群 99. 泉光院西やぐら群 130. 陣出やぐら群 154. 大慶寺横穴 209. なき塔遺跡
351. 陣出遺跡 359. 上町屋遺跡 360. 寺分藤塚遺跡 361. 大慶寺旧境内遺跡 362. 御霊神社裏遺跡 381. 富士塚 433. 藤塚西やぐら群 439. 泉光院遺跡

図2 周辺の遺跡

塚西やぐら群』)。なお、文献史料では古くは後北条氏の『小田原衆諸領役帳』（永禄2(1559)年)に、「(東郡(鎌倉が属する))須崎大慶寺分 養竹院」の記載があり寺院領であった。

近世ではこの「大慶寺分」が省略されて、「寺分(てらぶん)」村の地名がみられる(『新編鎌倉志』貞享2(1685)年)。石高は257石余、家数26軒と伝える(『新編 相模国風土記稿』天保12(1841)年)

近代になると明治22(1889)年に寺分村と梶原村、上町屋村、手広村、常盤村、笛田村、山崎村が合併して深沢村が成立した。20世紀に入り、本調査地点周辺には昭和17(1942)年に軍需工場が建設された。第二次世界大戦後の昭和20(1945)年には発足当初の日本国有鉄道大井工機部大船工場となったが、平成18(2008)年に閉鎖された(最終的な名称はJR東日本鎌倉総合車両センター)。

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査区の設定と調査の方法

上層調査 令和4(2022)年度の試掘確認調査で遺構の検出された範囲(TP5)を中心にして、南北30m×東西14m(420m²)の発掘調査範囲として設定した。調査区内は位置情報の目安として、世界測地系に基づいた基準点(m²単位の数字)を用いて、全面を5m方眼に組み込んだ。基点は調査地点の北東隅のX=-73575.0、Y=-28885.0である。この方眼の名称のつけ方は、南北方向(Y軸)はアルファベットの大文字でAから、東西方向(X軸)はアラビア数字で1からとし、呼称としては「A-1区」のようにした(これは下層調査にも適用)。現地調査はまず、表土を重機により掘削、除去し、遺構検出面が近くなったところで、人力掘削に切り替えて、遺構の平面形の精査に努めた。検出された遺構は半裁(竪穴建物は4分割)し、半裁の土層断面を記録し、(図面作成、写真撮影)、完掘時にも同様の記録作業を行った。図面作成には人手による実測と、トータルステーションによるデータ計測を併用した。特殊な出土状況の遺物は1点ずつ記録しながら取上げたり、微細図を作成した。また、特異な遺構はアップの写真撮影をしている。さらに、遺構確認状況や遺構完掘後の全体写真には小型無人航空機による撮影を試みた。

下層調査 上層調査中に調査区東壁際にサブ・トレンチを掘削し、遺物が出土した範囲で上層調査範囲の南側に137m²で設定した(図30。調査区南端は「溝」として掘削済みだったので除外している)。この調査は、重機を使用して、層位ごとに丁寧に掘削し、遺構が検出された時点で、人力精査し、上記の上層調査と同様に半裁、完掘、その度ごとの記録保存を行った。但し、排土置き場の都合から、調査範囲は東西に2分割して切り返して掘削した。掘削深度も深くなったため、安全を考慮して、調査区の壁際には段差を設けた。調査区内では概ねⅡ-9層



図3 調査範囲とグリッドの配置

中（標高約6.7m）まで掘削したが、東西2箇所を地山（岩盤）まで掘り下げて（東深掘り区は標高最深6.3m、西深掘り区は標高最深4.2m）、調査を終了した。遺物の取上げはトータルステーションによる1点ごとの点上げと、層位ごとの一括取上げを併用した。但し、層位は土色と土質による目視の分別であり、結果的には複数の層にまたがったものが多くなった。遺構等の図面作成方法は上層調査に準じる。

整理作業 遺構図面はトータルステーションで計測したデータと手取りした図面（平面図、土層断面図）を、デジタル・トレースし、版組、挿図を作成した。現場写真データもデジタル・データを写真図版として版組した。

遺物は、洗浄の後、注記を行った（遺跡略号:JD2364）。遺跡の特徴を表す資料を中心に抽出し、実測図を作成（原寸、手取り）、デジタル・トレースして挿図、版組と作業を進めた（この間に遺物の写真撮影も行う）。報告書掲載の各種の表も同様である。遺構と遺物の挿図、表、写真は遺構ごとにまとめ、これらに事実記載の文章を合わせて、デジタル編集を行った。

第2節 調査の経過

現場は令和5(2023)年8月16日から開始した。調査途中の10月10日～17日の間に、調査区の東壁際にサブ・トレンチを設定し、下層の掘削を行ったところ、弥生土器、土師器、須恵器等を出土する包含層が認められた。このため、上層の調査に引き続き下層の調査を行うこととなった。上層調査は10月8日には市民向けの現地説明会を行い、10月19日には終了した。この後、下層調査を12月7日から行った。掘削は概ね東西2分割の切り返しで行い、西半分は12月18日～22日にかけて、東半分は25・26日に行った。12月28日には市文化財課と深沢地域整備課の立会いの下に現場の終了確認を行った（資機材の搬出は、年明けの令和6(2024)年1月第2週前半）。



写真4 遺跡遠景（現地説明会開催時） 東から

整理作業については、現場が終了した令和6(2024)年1月4日から開始し、3月14日まで1次整理作業を行った。主な作業内容は、現場での各種台帳類の作成、遺構図面の作成や整理、出土遺物の洗浄等である。2次整理作業は、令和6(2024)年4月22日～11月29日まで行った。遺構図面のトレース、版組は5月中旬から入り、遺物は5月上旬から9月下旬にかけて注記、接合、実測、トレース、観察表の作成、版組、写真撮影を行った。この後、遺構と遺物の事実記載の執筆を7月上旬～10月下旬まで行った。10月中旬～11月下旬は編集、校正の過程を踏み、12月初旬には印刷、製本に入った。各種の納品準備は作業が終了したものから順次進めた（10月中旬～11月末）。

第4章 基本層序

本調査地点は、現地表面ではほぼ平坦であるが、表土層を剥がすと丘陵端部から沖積地へと移行する地点であり、下層では水が漬いてグライ化していた上層の堆積は、調査範囲の北端をほぼ最高標高とし、南端に向かって徐々に傾斜していく。現地表面の標高は北端で約9.5m、南端で約8mである。層序の観察は調査区東壁と下層調査の西深掘り区の北壁で行った(図4・5)。基本層序は上層からⅠ～Ⅳ層に大別したが、Ⅳ層の直下が地山(岩盤)である。地山(岩盤)は調査範囲の北端部では表土直下で検出されたが、南に向かって傾斜していき、南端部では標高約6.4mまで掘削したが到達しなかった。Ⅳ層の上層に堆積するⅢ層は調査範囲の北部の地山(岩盤)の傾斜を埋めるように堆積するが、S11の東側で終わる。Ⅱ層はⅢ層の上層でⅠ層の下層に堆積し、ほぼⅠ層の下にみられる。Ⅰ・Ⅱ層は南に向かって緩やかに傾斜し、その傾斜は調査区外へと続く。各層ごとに様相を述べれば、以下のようである。なお、個別の層の説明は図5に記載した。

表土層 褐色土1層で、砂質の黒褐色土の中に砂利が大量に含まれている。厚さ0.5～1.0mで認められる盛土層である。直下層のⅠ層の年代が(出土遺物から)近代とされていることから近代～現代の造成土である。

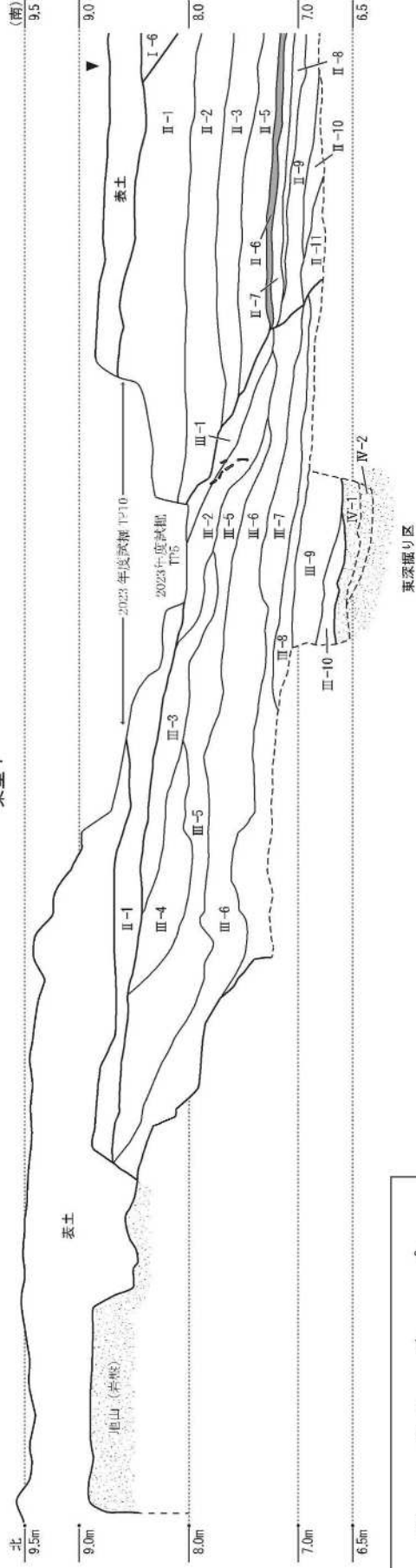
Ⅰ層 黒褐色～褐色土で6層に分層。調査範囲の南半部、S11の南壁より南側にみられる。Ⅰ-5・6層は共に厚さ0.7～1.0mで厚く盛土される造成土である。Ⅰ-5層を境に南側はグライ化しており、土色の変化を土層の違いと判断して、当初はこれを溝として調査した層である。溝とした調査範囲の南端部には、数10本の丸杭や、コンクリート杭も検出されていることから、攪乱されている部分が入っている可能性がある。出土遺物(陶磁器)から近代初期の造成土と推定される。なお、調査範囲北半部で検出された堅穴建物は、表土直下が検出面であったが、上部を削平されていた。本来の掘り込み面の標高はもっと高かったといえる。同様に北端の地山(岩盤)も削平されていて、Ⅱ-1層上面と同標高となっており、当初はもっと高かった。

Ⅱ層 16層に分層したが、Ⅱ-6層は褐鉄層で、その上下で土色は褐色系から黒褐色、暗褐色系へとグライ化により変色する。土色や土質から3種に分けられる。Ⅱ-1～5層：褐色土、Ⅱ-6層：褐鉄層、Ⅱ-7～12層：黒色粘質土、Ⅱ-13～16層：黒色砂質土である。Ⅱ-12・13層は腐食した植物遺体を含んでいる。上層調査の遺構確認面は表土直下のⅡ-1層、もしくはⅢ-3・4層となるが、Ⅱ-1層より下層は土師器・須恵器が大量に出土しており(第5章第3節2. 参照)、Ⅱ層の堆積には短時間しか有しなかったと考えられる。

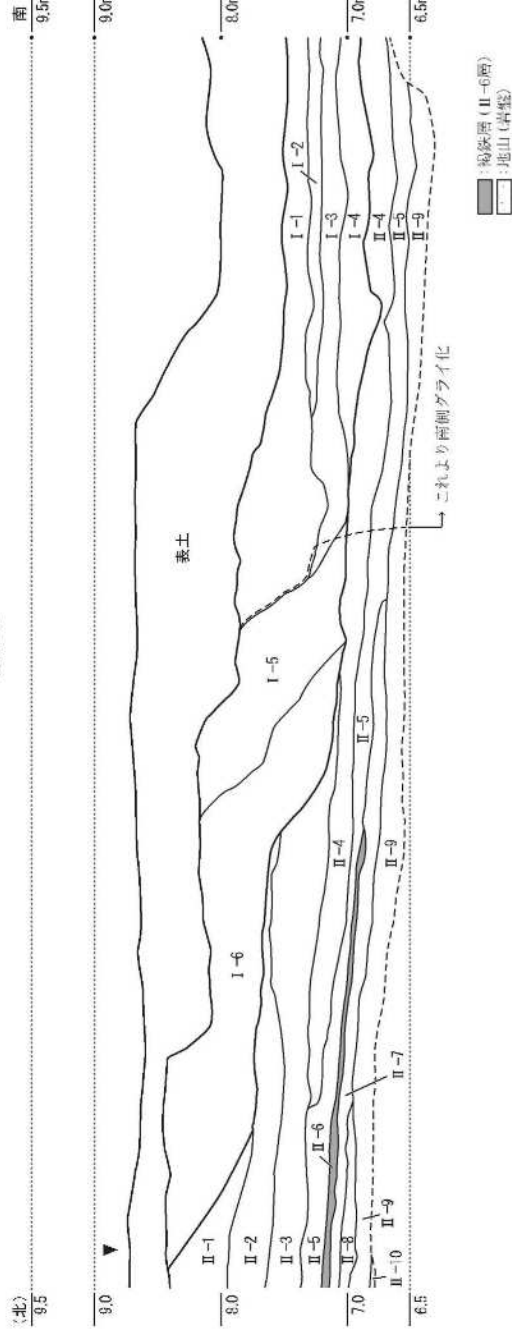
Ⅲ層 10層に分層するが、土色からはⅢ-1～6層(上層)の明褐色～黄褐色系の土と、グライ化して黒褐色系のⅢ-7～10層(下層)の2種に大別される。上層には砂岩粒・ブロックを少量～大量に含むが、下層には灰色スコリアと褐鉄が多く含まれる。砂岩粒・ブロックは、地山(岩盤)近辺の層が由来と考えられる。砂岩粒・ブロックを顕著に含む層は、Ⅲ-5層であるが、この層から下層(Ⅲ層下層)は水平堆積(南へ向けて緩く傾斜している)ので、砂岩粒・ブロックを含む層はないことから、調査区北側に続く地山(岩盤)の崩落、あるいは人為的な崩しや、移動も考えられる。Ⅱ層同様に上層調査検出遺構と、このⅢ層上層はそれほどの時間差がないと推定される。

Ⅳ層 グライ化した地山(岩盤)直上層である。土色は灰色系で、締まり・粘性が強い粘質土である。出土した遺物は縄文土器と弥生土器が僅かにみられるだけで、形成年代は弥生時代まで下と思われる。

東壁 1

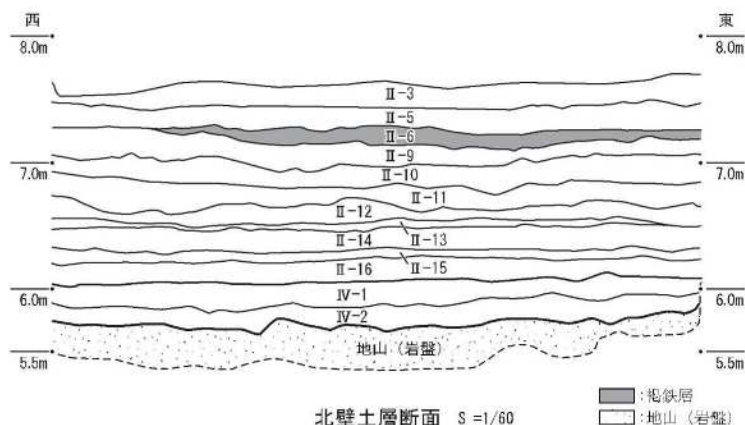


東壁 2



壁面土層観察場所

図 4 基本層序 1



基本層序土層説明

- 表土 褐色土 (10YR4/4) 締まり強い、粘性弱い。砂質の黄褐色土の中に砂利を大量に含む。
- I-1. 黒褐色土 (10YR3/1) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～3mm) 微量・灰色スコリア (粒径 1～3mm) 少量含む。褐鉄 (管状) が見られる。砂質土。
- I-2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径 5～10mm) 少量含む。砂質土。土色は I-1 層より明るい。
- I-3. 黒褐色土 (10YR3/1) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～3mm) 少量を含む。粒体の細かい砂質土。土色は I-2・3 層とも I-1 層より明るい。
- I-4. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 微量含む。
- I-5. 褐色土 (10YR4/4) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 多量、灰色スコリア (粒径 1～3mm) 少量含む。砂質土。
- I-6. 褐色土 (10YR4/4) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 大量を含む。土色は I-5 層よりやや明るい。砂質土。
- II-1. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径 5～20mm) 多量含む。
- II-2. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径 5～10mm) 少量、灰色スコリア (粒径 1mm) 微量含む。
- II-3. 褐色土 (10YR4/4) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 中量含む。
- II-4. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～3mm)・灰色スコリア (粒径 1mm) 微量、褐鉄粒 (粒径 5mm) 少量含む。南端は粒体の粗い砂を含む。
- II-5. 褐色土 (10YR4/4) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 中量、褐鉄 (粒径 1～3mm) 少量含む。
- II-6. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) 締まり強い、粘性弱い。褐鉄層。褐鉄は板状で多い。
- II-7. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 中量含む。
- II-8. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや強い、粘性強い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 少量含む。腐食した植物遺体を含む。粘質土。グライ化。
- II-9. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まり強い、粘性弱い。灰色スコリア (粒径 1～5mm)・褐鉄 (粒径 1～3mm) 多量含む。褐鉄の影響で層全体の色調が赤みを帯びる。粘質土。グライ化。
- II-10. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり強い、粘性あり。砂岩粒 (粒径 1～3mm) 微量、灰色スコリア (粒径 1～3mm) 多量、赤色スコリア (粒径 1～2mm) 微量含む。褐鉄 (管状) が見られる。粘質土。グライ化。
- II-11. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり強い、粘性あり。灰色スコリア (粒径 1～3mm) 少量含む。褐鉄 (管状) が見られる。粘質土。グライ化。
- II-12. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まり強い、粘性やや強い。腐食した植物遺体を含む。褐鉄 (管状) が見られる。真上の II-10 層より混入物少ない。粘質土。
- II-13. 黒色土 (10YR2/1) 締まり強い、粘性やや強い。灰色スコリア (粒径 1～5mm) 微量、腐食した植物遺体・褐鉄 (管状) を少量含む。真下の II-14 層より土色やや明るい。砂質土。グライ化。
- II-14. 褐灰色土 (10YR4/1) 締まり強い、粘性やや強い。灰色スコリア (粒径 1～5mm) 多量含む。II-13 層より土色は出い。下部に黒色粘土が筋状に堆積する。砂質土。グライ化。
- II-15. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり強い、粘性やや強い。下部に褐鉄 (粒径 1～5mm) が筋状に堆積する。砂質土。グライ化。
- II-16. 黒色土 (10YR2/2) 締まり・粘性強い。灰色スコリア (粒径 1～5mm) 少量含む。砂質土。グライ化。
- III-1. 褐灰色土 (10YR4/1) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 5mm) 中量含む。
- III-2. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 5mm) 少量、灰色スコリア (粒径 1mm) 微量含む。砂岩粒の量は真上の III-1 層より少ない。粘生土層集中土層。
- III-3. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 5mm) 微量、灰色スコリア (粒径 1～3mm) 多量、褐鉄粒 (5mm) 少量含む。
- III-4. 暗褐色土 (10YR3/3) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径 5～50mm)・灰色スコリア (粒径 1～3mm) 多量含む。砂岩粒・BL は北半部に多い。
- III-5. 明黄褐色土 (10YR6/6) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒・BL (粒径 5～300mm) 大量含む。砂質土。
- III-6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1～3mm)・灰色スコリア (粒径 1mm) 微量、褐鉄粒 (粒径 5mm) 南半部に多量含む (褐鉄層 (II-6 層) の北側への影響)。
- III-7. 暗褐色土 (10YR3/4) 締まり強い、粘性弱い。砂岩粒 (粒径 1mm) 微量、褐鉄粒 (粒径 5mm) 多量含む。色調やや赤味帯びる (褐鉄層 (II-6 層) の北側への影響)。
- III-8. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり強い、粘性弱い。灰色スコリア (粒径 1～3mm)・褐鉄粒 (粒径 5mm) 多量含む。砂質土。色調やや赤味帯びる。下層はグライ化。
- III-9. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや強い、粘性あり。灰色スコリア (粒径 1～3mm) 多量、褐鉄 (管状) を多く含む。粘質土。グライ化。
- III-10. 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや強い、粘性強い。灰色スコリア (粒径 1～3mm) 微量、褐鉄 (管状) を多く含む。粘質土。グライ化。
- IV-1. オリーブ灰色土 (2.5GY5/1) 締まり・粘性強い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 中量含む。II-16 層末の BL が混入する。粘質土。グライ化。
- IV-2. 暗オリーブ灰色土 (5GY4/1) 締まり・粘性強い。砂岩粒 (粒径 1～5mm) 中量含む。粘質土。グライ化。
- 地山 (岩盤) 灰色土 (N5/0) 締まり強い、粘性弱い。一部酸化し黄褐色化する。地山 (岩盤)。

図 5 基本層序 2

第5章 発見された遺構と遺物

第1節 概要

本調査は、陣出遺跡内で初めて発掘された地点である。この調査で検出された遺構と遺物は以下のようである。

上層調査：当初の調査で検出された遺構で、竪穴建物4軒、土坑3基である。この他に現場では遺構として調査したが、整理作業時に検討した結果、包含層を誤認した6基がある。出土した遺物は竪穴建物に伴う奈良・平安時代の土師器、須恵器が主体を占めている。その他量は少なくなるが、同時期の灰釉陶器、石製品（砥石が主体）などもみられる。また、人力掘削した調査区南端（溝の部分）ではⅠ層から中世～近代の陶磁器、土器が少量だが出土している。

下層調査：土坑1基と、包含層を掘削した。竪穴建物は奈良時代が1軒、平安時代前期（9世紀）が3軒である。土坑からは獣骨1個体が出土した。出土遺物は、上記の時代より遡る縄文土器と石器、弥生土器もあり、土師器・須恵器の量は圧倒的に多い中で、その他に灰釉陶器・緑釉陶器・石製品・木製品などの出土もみられる。

なお、本調査では現場では遺構と判断していたが、整理段階で包含層としたものが、上記のように5基あった。これは項目名を「包含層の落込み」として、第2節3. で記述している。

第2節 上層調査

1. 竪穴建物

SI1

位置・切合い 調査区中央東寄りのC・D-4・5区にまたがって位置する。覆土は西南部に向けて削平され、西南角は欠失する。また東壁と南壁の一部を試掘坑に切られて欠損する。

形態・規模 平面形は東西方向に長軸をとる長方形を呈する。規模は、東西5.00m、南北3.70m、深さは0.30mを測る。主軸方位はN-79°-Eである。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝、柱穴は無いが、北西角に小穴（P1）が検出された。平面形は不整形で、規模は0.23×0.23m、深さ0.15mを測る。竈の前方の床面には、東西方向に長い硬化面（長軸1.75m、短軸0.7m）が、また、竈の西南部には焼土の散布がみられた（0.47×0.40m）。

覆土 上下の2層で、下層（2層）より、上層（1層）は土色がやや明るく、焼土粒や炭化物粒を少し含んでいる。

竈 北東角に位置する。竈構築土と竪穴覆土との見分けがつきにくく、切石と支脚の位置から類推すれば、竪穴の北東角をそのまま利用し、角を煙道としている。支脚は、竪穴南壁の北側の延長線上にある。切石製の支脚を中心にすれば、南北それぞれ0.3～0.4mの位置には砂岩の切石が数個みられ、これが南北壁と推定される。南壁側の切石の竈内面側は被熱により赤化していた。覆土（1～10層）は、砂岩粒と焼土粒を少量から多量に含む明～黒褐色土であり、砂質粘土である。掘方の平面形は、使用面よりひと回り大きい円弧形である。掘方の覆土（11～13層）は、覆土より砂粒の量は少ない。

遺物出土状況 全体的に分布するが、竈内ではより多い遺物がみられた。実測遺物の図9-6は竈内から出土している。なお、接合関係はなかった。

出土遺物 覆土から土師器263点、須恵器46点、床面から土師器5点、須恵器1点、延暦貞観スコリア2点、竈覆土から土師器94点、須恵器7点、竈掘方から土師器5点が出土し、混入した遺物としては、縄文土器2点、縄文石器（剥片含む）7点、弥生土器5点がある。このうち土師器5点、須恵器1点、砥石1点の計7点を図9に掲載した。図9-1～5は土師器の坏で、外面の体部下半には篋目が残る横位の削りが施される相模型坏である。1・5は底部外面は一定方向の